

青年期における地元志向性とそれに関わる発達課題

鳥取大学地域学部地域教育学科 田中大介

鳥取大学大学院地域学研究科 米原拓矢

I. はじめに

地方都市圏に生まれ育った若者は、首都圏をはじめとする大都市圏に生まれ育った若者に比べ、進学や就職の選択の幅が少ない。そのため、生まれ育った地方に自らのニーズに合致する選択肢がない場合が多く、結果として生まれ育った地域を離れる割合が多い。いわゆる「故郷を離れ上京する若者」は、近現代における都市集約型の社会システムにおける帰結であり¹⁾、若年層の人口移動は、都市圏への一極集中を所与とする構造に基づいて社会的にあるいは経済学的に説明されてきた。

一方、こうした若者の移動は心理社会的における発達課題としても解釈されてきた。例えばエリクソンの発達段階モデルでは、青年期において自らのアイデンティティを模索する過程が想定されている²⁾が、この枠組みの中で、親元を離れ都市へと向かう若者像はこの発達段階モデルの想定する、青年期における発達期待とうまく合致しているといえる。その一方で、親元すなわち生まれ育った地元に残るとする選択は、少なくとも表面的には、親の権威に盲従するフォークロージャリー型と類型化³⁾され、否定的に評価される傾向にある。

しかし、われわれの文化・社会をより広範な空間的広がりをもって、あるいはより長期的な時間展望に立って俯瞰したとき、上記した心理社会的発達期待の限界が認識される。すなわち、こうした「故郷を離れる」発達モデルは、近現代における都市集約型の産業社会においてのみ適応的なものである。伝統的な共同体を考えたとき、あるいは地方のコミュニティの持続性を念頭に置いたときには、「故郷を離れる」発達モデルは、むしろ人材を枯渇させる呪縛として機能しているともいえる⁴⁾。今後、複数の持続可能社会が水平方向でつながるような共存社会を目指すのであれば、こうした発達期待はその多様性のひとつの選択肢に過ぎない⁵⁾。

以上の議論を踏まえ、子どもたちが発達する過程で、自らが生まれ育った愛着のある地域（＝地元）をどのように認識していくのか、現状把握とその発達モデルの構築が本研究全体を通じての目的である。平成 25 年度はまず大学生を対象に個人の「地元志向」を測定する指標を作成するとともに、その志向性がどういった個人的特性と関連するのか質問紙調査を行った。個人的特性に関して具体的には、5 次元理論に基づく 5 つのパーソナリティ（性格）特性、異文化と自文化に対する姿勢、そして両親からの心理的な結びつきの程度を取り上げた。

II. 対象と方法

対象は鳥取大学の大学生 290 名であり、内訳は男性 152 名、女性 138 名、平均年齢は 19.6 歳（SD=1.48）であった。

方法として、以下の質問紙を作成・実施した。まず、地元志向尺度を新たに作成した。具

体的には、地元志向を「地元への定住志向」と「地元への愛着」という2つの下位概念によって構成されると想定した。そして、前者の測定ツールとして定住志向尺度⁶⁾を「地元」への定住に限定する内容に修正したものを用い、後者の測定ツールは「地元」における親や友人、および場所そのものに対する愛着を尋ねる項目を作成した。全12項目を用いて妥当性の検証を行い、最終的に各4項目からなる質問紙とした。

これに加えて、パーソナリティの評価としてBig Five短縮版⁷⁾、文化的志向性として異文化志向尺度⁸⁾および自民族中心主義尺度⁸⁾、両親からの心理的離乳を検討する質問項目として親-青年関係尺度⁹⁾を用いた。Big Five短縮版に関しては、「情緒不安定性」、「外向性」、「開放性」、「調和性」、「誠実性」の5つの性格特性ごとに得点が算出され、得点が高いほどその特性が強いと評価される。

異文化志向性と自民族中心主義は、「地域志向」と「コスモポリタニズム」との関連を検討するために用いられた。「異文化志向性」は「異文化体験志向」に代表される、外へ向かう志向性を評価するものであり、得点が高いほど外への志向性が高いと評価される。一方で「自民族中心主義」は「コスモポリタニズム」尺度を構成する「反“自民族優秀性”意識」、「異文化体験志向」「地球運命共同体意識」「国家不用意識」の4つの下位尺度のうちの「反“自民族優秀性”意識」を用い、得点が高いほど自民族の優秀性を高く評価する傾向が示されるものであった。

最後に両親からの心理的離乳に関しては、父親、母親それぞれに対して、「父(母)親からのポジティブな影響」、「父(母)親との対立」、「父(母)親への服従」、「父(母)親との情愛的絆」、「一人の人間として父(母)親を認知」の5要素について評価するもので、得点が高いほどそれぞれの傾向が高いことを示すものであった。

III. 結果

大学生の地元志向性の2つの下位尺度得点をそれぞれ従属変数とし、パーソナリティ、異文化志向および自民族中心主義、心理的離乳のそれぞれを独立変数とした重回帰分析を行った。

1) パーソナリティが地元志向に与える影響

Big Five短縮版(並河他,2009)の得点、学部、性別を独立変数とした重回帰分析を実施した。「地元への定住志向」の得点を従属変数とした結果、説明率は3.3%であり、分散分析の結果は5%の水準で有意にならなかった($F(7,259)=1.265, n.s.$)。標準化係数は、「開放性」が5%水準で有意な負の係数を示し(-.157)、学部が正の有意傾向を示した(.107)。

「地元への愛着」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は9.6%であり、分散分析の結果は5%の水準で有意であった($F(7,260)=3.946, p<.001$)。標準化係数は、「調和性」(.228)と性別(.165)が1%水準で有意な正の係数を示し、「開放性」が正の有意傾向(.119)を示した。

2) 異文化志向・自民族中心主義が地元志向に与える影響

異文化志向尺度(前村,2011)、自民族中心主義尺度の得点、学部、性別を独立変数とした

重回帰分析を実施した。「地元への定住志向」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は9.8%であり、分散分析の結果は5%の水準で有意であった ($F_{(4,264)}=7.203, p<.001$)。標準化係数は、「異文化志向」が0.1%水準で有意な負の係数 (-.305)、学部が5%水準で有意な正の係数を示し (.147)、「自民族中心主義」が正の有意傾向 (.107) を示した。

「地元への愛着」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は14.9%であり、分散分析の結果は5%の水準で有意であった ($F_{(4,265)}=11.583, p<.001$)。標準化係数は、「自民族中心主義」が0.1%水準で有意な正の係数 (.357) を示した。

3) 心理的離乳が地元志向に与える影響

親子関係が地元志向性に与える影響を分析するために、親一青年関係尺度 (小高,2000) の父親に関する得点と母親に関する得点とを別々に、学部、性別を独立変数、地元志向性尺度の得点を従属変数とした重回帰分析を実施した。

まず、親一青年関係尺度 (小高,2000) の父親に関する項目の得点、学部、性別を独立変数として、「地元への定住志向」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は4.2%であり、分散分析の結果は5%の水準で有意にならなかった ($F_{(7,257)}=1.627, n.s.$)。標準化係数は、「一人の人間として父親を認知」が5%水準で有意な負の係数 (-.162) を示した。従属変数を「地元への愛着」の得点とした結果、説明率は10.9%であり、分散分析の結果は5%の水準で有意であった ($F_{(7,258)}=4.494, p<.001$)。標準化係数は、「父親との情愛的絆」が0.1%の水準で有意な正の係数 (.315)、「一人の人間として父親を認知」が1%の水準で有意な負の係数 (-.164)、性別が5%の水準で有意な正の係数 (.150) を示し、「父親からのポジティブな影響」が負の有意傾向 (-.135) を示した。

次いで、親一青年関係尺度 (小高,2000) の母親に関する項目の得点、学部、性別を独立変数として、「地元への定住志向」の得点を従属変数とした解析の結果、説明率は6.1%であり、分散分析の結果は5%水準で有意であった ($F_{(7,259)}=2.385, p<.05$)。標準化係数は、「一人の人間として母親を認知」が5%の水準で有意な負の係数 (-.164) を示し、「母親への服従」が負の有意傾向 (-.111) を示した。

「地元への愛着」の得点を従属変数とした結果、説明率は8.4%であり、分散分析の結果は5%水準で有意であった ($F_{(7,260)}=3.416, p<.01$)。標準化係数は、「母親との情愛的絆」

(.170) と性別 (.142) が5%水準で有意な正の係数を示し、「一人の人間として母親を認知」が負の有意傾向 (-.121) を示した。

IV. 考察

「地元志向」とパーソナリティ特性や文化志向、両親との心理的な結びつきの関連を検討した結果、さまざまな関連が見出された。詳細な考察に関しては他所で述べるとして、全体的な傾向や、結果から得られた示唆に関して簡単に述べる。

まず、パーソナリティ特性との関連に関して、「調和性」が高い人は「愛着」が強い傾向があり、また、「開放性」に関連性が見出されるなど、「地元志向」とパーソナリティ特性の間には合理的に説明可能な関係性があることが見出された。本研究では「地元志向」が従

属変数となる前提での解析を行ったが、実際にはどちらが原因となり、結果が生じるのか、発達のより早い段階での関係性を把握することが、「地元志向」を捉える上で重要になってくると思われる。

また、「地元への愛着」に関して、女性のほうが男性より高くなる傾向が示された。地域とのつながりにおいて、女性のほうが情緒的な結びつきが強いという傾向は興味深い。関連して、心理的離乳に関して親からの精神的な独立が地元志向を低め、反対に依存が強いと地元志向を高める傾向が示された。こうした観点は、従来の発達観と合致するものであるが、地元志向を精神的な未熟さと短絡的に結びつけることのないよう、結果を精査・解釈する必要があるだろう。

同様に文化志向性と地元志向に関しても、子どもたちが「外」への志向を保ちながらも「地元志向」を両立しうるような心理的モデルを醸成しうる環境づくりを模索する必要があると思われる。

V. 参考文献

1. 石黒格, 李永俊, 杉浦裕晃, 山口恵子. (2012). 「東京」に出る若者たち ミネルヴァ書房
2. エリクソン, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. Norton and Company, Inc. (エリク・H・エリクソン 西平直・中島由恵 (訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル*)
3. Mercia, J. E. (1966). Development and Validation of Ego-Identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
4. 吉川徹. (2001). *学歴社会のローカルトラック 地方からの大学進学* 世界思想社.
5. Rogoff, B. (2003). *The Cultural Nature of Human Development*. Oxford University Press. (バーバラ・ロゴフ 當眞千賀子 (訳) (2006). *文化的営みとしての発達 個人、世代、コミュニティ* 新曜社)
6. 前村奈央佳 (2011). 移動と定住に関する心理的特性の検討:異文化志向と定住志向の測定および関連性について. 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6, 109-124.
7. 並河努, 谷伊織, 脇田貴文, 熊谷龍一, 中根愛, 野口裕之. (2009). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 *心理学研究*, 83, 91-99.
8. 岩田紀. (1989). コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討. *社会心理学研究*, 4, 54-63.
9. 小高恵. (1998). 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究. *教育心理学研究*, 46, 333-342.

(付記)

本研究は第二著者が筆頭著者の指導の下、鳥取大学地域学部地域教育学科の卒業研究として実施したものである。